

平重衡論

——「人笑はせ」「牡丹」と言われた男——

松本 純奈

はじめに

平重衡は、南都焼討ちを行い、東大寺や興福寺などを焼失させた人物として有名である。『玉葉』や『平家物語』には仏敵としての重衡が描写され、後世にもそのイメージが受け継がれてゆく。しかし、『建礼門院右京大夫集』や『平家公達草紙』に目を向けると、南都焼討ちをイメージさせるような記述はなく、優美ですばらしい人物の重衡像を記している。『平家物語』も、仏敵としての重衡像を描きつつも、優美な公達としての重衡像も記している。佐伯真一氏は、『平家物語』は、重衡に南都焼討ちの罪を生涯負せながら、処刑の場面では仏に向かい念仏を唱えながら死を迎えるという、最後には救済に向かつていく姿を描いていると指摘している。⁽¹⁾ 重衡の人物像についての研究は、その多くが仏敵としての重衡に注目しており、優美な公達像については言及されていない。⁽²⁾

本稿では、第一章で重衡の生涯をまとめ、第二章で仏敵としての

重衡像を、第三章では各作品における優美な公達としての重衡像について論じていく。

一、生涯

平重衡は、平清盛の五男として、保元二年（一一五七）に生まれた。母は平時子である。『平家物語』に「入道殿にも二位殿にもおぼえに御子にてましまししかば、御一家の人々も重き事に思ひ奉り給ひしぞかし」とあること⁽³⁾から、両親のお気に入りであり、一家の人々も重んじていたことが知られる（内裏女房）。同母兄に宗盛、知盛、同母妹に徳子（建礼門院）がいる。⁽⁴⁾

以下に生涯の官位をまとめておく。⁽⁴⁾ 応保二年（一一六二）十二月に六歳で従五位下、翌年一月に尾張守となる。仁安元年（一一六六）十一月に従五位上、十二月に左馬頭に任じられ、翌年一月に正五位下、八月に従四位下に叙せられる。嘉応三年（一一七二）一月に従

四位上に叙せられ、承安二年（一一七二）二月に徳子が中宮になると中宮亮を兼務し、数日後には正四位下に任じられた。治承二年（一一七八）十二月、言仁親王（後の安徳天皇）の立太子に伴い、春宮亮、翌年一月に左近衛権中将、治承四年（一一八〇）一月、蔵人頭に任じられる。治承五年（一一八一）五月、二十五歳で従三位に叙せられ、公卿となる。養和二年（一一八二）三月には、但馬権守を兼ねている。寿永二年（一一八三）一月に正三位になるが、同年八月に平家都落ちによって解官されている。

治承二年六月、重衡は徳子の安産祈願のために嚴島神社へ奉幣使として下る。『玉葉』によると、十一月の徳子がお産の気ありと報告したのが重衡で、言仁親王誕生の報告をしたのが平時忠らしいが、『平家物語』では、言仁親王誕生の際に「御産平安、皇子御誕生候ぞや」と報告したのが重衡である（御産）。『玉葉』と『平家物語』では事実には違があるが、『平家物語』はなぜ重衡としたのだろうか。治承四年一月には、三歳の言仁親王の着袴の儀で親王を抱き、御座に据えた。同年二月の讓位の儀でも、同じように皇子を抱いて登場する。同年四月の安徳天皇即位では、天皇の後ろの帷をかかげている。⁽⁸⁾⁽⁹⁾

重衡の運命を決めた南都攻撃は、治承四年十二月二十七日に行われ、当時の様子が『玉葉』に記されている。南都焼討ちについては

後述するが、まずは簡単に概略を記しておきたい。

去夜重衡朝臣寄南都、其勢依莫大、忽不能合戦云々、

伯川原之辺在家併焼松、或又欲焼光明山云々

『玉葉』治承四年十二月二十八日条

ここでは、重衡が前日に伯川原の辺の在家や光明山を焼こうとしたことが記されている。また、翌日の記事はさらに詳しい。

重衡朝臣征伐南都、只今帰洛云々、又人云、興福・東大寺已下堂宇・房舎弘地焼失、於御社者免了云々、又悪徒三百余人鬣首

之、其殘逃籠春日山云々、至于凶徒之被戮者、還為御寺要事、

七大寺已下悉變灰燼之条、為世為氏佛法滅尽了坎、凡非言

語之所及、非筆端之可記（『玉葉』治承四年十二月二十九日条）

この記事からは、興福寺や東大寺などの七大寺が焼失し、その様子が「凡非言語之所及、非筆端之可記」であったことがわかる。『平家物語』でもほぼ同じように描かれているが、より具体的かつ、鮮烈な記述である。

をめきさげぶ声、焦熱大焦熱、無間阿鼻のほのほの底の罪人も、

これには過ぎじとぞ見えし。

『平家物語』奈良炎上

『平家物語』では、『玉葉』のような記録としてではなく、現場を見て書いたかのように具体的に記されている。⁽¹⁰⁾ また、『玉葉』に、

「伝聞、来廿五日遣官軍於南都 捕搦悪徒、焼払房舎、可魔滅一宗云々」(治承四年十二月二十一日条)とあり、当初から焼き払う予定であった。しかし、『平家物語』では、意図せずして焼く結果になったと弁明する重衡を描く。⁽¹¹⁾

寿永三年(一一八四)二月、一谷合戦に副將軍として出陣し、乳母子の後藤兵衛盛長の裏切りによつて生け捕られる。⁽¹²⁾その後『平家物語』では、都に連行されてからは、平家の所持する三種の神器との交換を交渉する材料にされた。⁽¹³⁾しかし、『玉葉』では、重衡自らが神器返還の交渉を買って出て、和議を図ろうとした。⁽¹⁴⁾『平家物語』によると、鎌倉へ連行される途中では、思いを残すことになる子がないことを、かえつて幸せに感じたといふ。⁽¹⁵⁾

元暦二年(一一八五)六月、重衡は東大寺・興福寺を焼失させた罪を問われて処刑される。兄宗盛とともに鎌倉を出発するが、一人奈良へ向けられて木津で処刑され、首は奈良坂にさらされた。⁽¹⁷⁾『平家物語』では、重衡の首は南都焼討ちの号令をかけた場所にさらされる。⁽¹⁸⁾このように、『玉葉』と『平家物語』で首のさらされる場所が異なっているが、この点について、詳しくは後述する。

二、仏敵としての重衡

重衡は、南都焼討ちの罪を生涯負うことになる。南都を焼討ちにした重衡の評価は、『玉葉』に詳しく記されているので、以下に引用しよう。

今日追討使藏人頭正四位下重衡朝臣、相具院庁下文(先日景高持向之由風聞、謬説云々)、所発向也、今日宿宇治、来十九日可着美乃・尾張之境云々、随兵万三千余騎云々、雖为重喪中陰之内、依前幕下命、不顧先父之追慕坎、重衡堪武勇之器量之故、殊宥此撰云々、愚案、重衡者、其身向南都、滅亡東大・興福両寺、法相・三論二宗者也、四所明神、七堂三玉、定与冥罰坎、因兹乍在父喪、忘哭泣之礼、赴合戦之場、果以可報彼逆罪者也、造意之禪門已当其罰、下手之重衡豈免彼殃哉、天然之理、得而可知、努力々々

〔玉葉〕治承五年閏二月十五日条

清盛の死の直後、重衡は「武勇之器量」を評価され出陣する。清盛は南都焼討ちの指示をしたため、「已当其罰」り、「あつち死」をする。南都焼討ちの実行犯である「下手之重衡」も、「豈免彼殃哉」とあるように、罰が下るのが当然であるとしている。その後、重衡が帰洛する際には、「余案之、重衡無為無事帰洛者、誠神罰始似有疑者坎、始終定有様坎、莫言々々」(『玉葉』治承五年三月十三日条)とされている。兼実は、重衡に神罰が下らず、無事に帰洛したこと

に驚いている。このときは、まだ平氏が官軍で源氏が賊軍であったことを考えると、重衡にとつて厳しい評価であると言えよう。

寿永三年（一一八四）に、一谷合戦で生け捕られた重衡は出家を望むが、頼朝と面会するまでは、と許されなかつた。⁽¹⁹⁾その後、鎌倉に連行され、頼朝と面会するが、処刑に至るまで出家しておらず、⁽²¹⁾死ぬまで南都焼討ちの罪を負い続けたのである。

『玉葉』によると、重衡は木津で処刑され、首は奈良坂にさらされたと伝聞のかたちで記されている。

伝聞、重衡首於泉木津辺切之、令懸奈良坂云々

〔玉葉〕元暦二年六月二十三日条

奈良坂には処刑場があり、死体が放置されている場所であつた。

『日本霊異記』には次のような記述がある。

往にし大化の二年の丙午に、宇治橋を當らむとして往来する時に、鬪體奈良山の溪ニ在りて、人・畜の為に履マル。

〔日本霊異記〕「人・畜二履まれし鬪體の、救ひ収めらえて霊しき表を示して、現に報いし縁」

ここでは、「奈良坂」ではなく「奈良山」とあるが、どちらも同じ場所を示している。奈良坂は、『日本霊異記』の時代から、死体をさらす場所というイメージがあつた。しかし、『平家物語』において重衡

の首がさらされた場所は、さらに具体的である。

その頸をば般若寺大鳥井の前に釘つけにこそかけたなりけれ。治承の合戦の時、ここにうつつたつて伽藍をほろぼし給へる故なり。

〔平家物語〕重衡被斬

般若寺は奈良坂にある寺である。重衡は、「ここにうつつたつて伽藍をほろぼし給へる故」に、まさに南都焼討ちの号令をかけた場所に首をさらされた。処刑の後までも、南都焼討ちの罪を背負うことになつている。『源平盛衰記』は、『平家物語』と似たような記述だが、まず法華寺の鳥居前で、首を鉾の先に貫いて高く差し上げ、人々の見せしめにし、⁽²²⁾遺骸を犬が食へようと争つていたことなどが記されている。『平家物語』や『玉葉』よりも色濃く重衡の南都焼討ちの罪が意識される描写である。

仏敵としての重衡のイメージは、後世にも残っていたらしく、『六代勝事記』に次のような説話が残っている。

次将三位中将重衡をいけどりにして、東関より南都にうつして首をきらしむ。先年東大寺を焼たりし故也。遺跡しかしながら伽藍に施入す。重衡の後室金銅を大仏にあひくはへてゐるときに。其あかぢねわかずして御身に和せずといへり。

のぼりにし烟の闇や隔つらん人のおどろく鐘の響に

〔六代勝事記〕

重衡による南都焼討ちによって焼失した東大寺大仏の再建のため、

後室が重衡の金銅を寄付したところ、他のものと溶け合わなかったという。同じような説話が『東大寺造立供養記』⁽²⁴⁾や『東大寺統要録造仏篇』にも見え、⁽²⁵⁾仏敵としての重衡のイメージは強かったようだ。

仏敵のイメージが強い重衡も、『平家物語』では、斬られる直前に重衡の部下が登場し、仏を重衡の前に立て、その手に紐をかけ、紐の端を重衡に持たせ、念仏を唱えながら死を迎える。

すでに只今きり奉らむとするところはせついで、千万立ちかこうだる人のなかをかきわけかきわけ、三位中将のおはしける御そばちかう参りたり。「知時こそただ今御最後の御有様見参らせ候はんとて、是まで参りてこそ候へ」と泣くく申しければ、中将、「まことに心ざしのほど神妙なり。仏ををがみ奉つてきればやと思ふは、いかがせんずる。あまりに罪ふかうおぼゆるに」と宣へば、知時、「やすい御事候や」とて、守護の武士に申しあはせ、そのへんにおはしける仏を二体むかへ奉つて出できたり。幸に阿弥陀にてぞましましける。河原のいさこの上に立て参らせ、やがて知時が狩衣の袖のくくりをといて、仏の御手につかけ、中将にひかへさせ奉る。これをひかへ奉り、仏にむかひ奉つて申されけるは、(略) 声高に十念となへつつ、頸をのべてぞきらせられける。

『平家物語』重衡被斬)

『平家物語』は、南都焼討ちの罪によって出家が許されないことや、死後も首を南都焼討ちの号令をかけた場所にさらすなど、仏敵としての姿を描きつつ、仏に向かい念仏を唱えながら死を迎えるという、救済に向かう重衡を同時に描いている。

三、優雅な公達

(1) 『建礼門院右京大夫集』

仏敵としてのイメージを後世に残した重衡であるが、『建礼門院右京大夫集』には優雅な公達として登場している。例えば、『平家物語』では、重衡が生け捕りになったのは、南都焼討ちの罪によるものだといふが評価したが、『建礼門院右京大夫集』には次のように記されている。

重衡の三位中将の、うき身になりて、都にしばしときこえしころ、ことにくむかし近かりし人々の中にも、朝夕なれて、をかききとをいひ、又はかなきことにも、人のためは、便宜に心しらひありなどして、ありがたかりしを、いかなりけるむくいぞと心うし。見たる人の、「御顔はかはらで、目もあてられぬ」などいふが心うくかなしさいふかたなし(『建礼門院右京大夫集』二二二番歌詞書)⁽²⁶⁾

右京大夫は、重衡が生け捕られたことについて、「いかなりけるむくいぞと心うし」と記しているのみで、南都焼討ちについては触れていない。これは、焼討ちの報いをぼかしているのだろうか。それとも、要因はないと見ているのだろうか。さらに、重衡の人柄を「をかしきことをいひ、又はかなきことにも、人のためは、便宜に心しらひありなどして、ありがたかりし」と評価している。右京大夫が南都焼討ちの事実を知らないはずがないが、その罪をも打ち消すような重衡の魅力を強調したかったとは考えられないだろうか。

『建礼門院右京大夫集』は、この場面以外でも重衡の人柄を見ることができる。

この人もよしなしごとをいひて、草のゆかりをなにか思

ひはなつ、たゞおなじ事と思へ」と、つねにいはいはれしか

ば

ぬれそめし袖だにあるをおなじ野の露をはさのみいかゞわく

へき

(一九六番歌)

おほかたは、にくからずいひかはして、「はてまでもかや

うにだにもあらむ」といはれしかば

忘れじの契たがはぬ世なりせばたのみやせまし君がひとこと

(一九七番歌)

(『建礼門院右京大夫集』)

右京大夫は平資盛と恋仲にあり、重衡は資盛の叔父にあたる。そのため、重衡は右京大夫に「草のゆかりをなにか思ひはなつ、たゞおなじ事と思へ」という冗談を言っていた。

『建礼門院右京大夫集』における重衡は、親しみやすく明るい人物として登場するが、次の場面はその典型である。

宮のまうのぼらせ給御供してかへりたる人々、物語りせしほどに火も消えぬれど、炭櫃の埋み火ばかりかきおこして、おなじ心なるすぢ四人ばかり、「さま／＼心のうちども、かたへはのこさず」などいひしかど、思ひ／＼に下むせぶことは、まほにもいひやらぬしも、我心にも知られつゝ、あはれにぞおぼえし

思ふどち夜半の埋み火かきおこしやみのうつゝにまどゐをぞ

する

(一九二番歌)

たれもその心のそこはかず／＼にいひはてねどもしるくぞあ

りける

(一九三番歌)

など思ひつゞくるほどに、宮の亮の、内の御方の番に候

ひけるとて入り来て、れいのあだごとも、まことしき

とも、さま／＼をかしきやうにいひて、我も人もなめ

ならず笑ひつゝ、はてはおそろしき物語りどもをしてお

どされしかば、まめやかにみな汗になりつゝ、「今は聞か

じ。のちに」といひしかど、猶々いはれしかば、はては衣をひきかづきて、「聞かじ」とて、寝てのちに心に思ふこと、

あだごとくにたゞいふ人の物がたりそれだに心まどひぬるかな

(一九四番歌)

鬼をげに見ぬだにいたくおそろしきに後の世をこそ思ひしりぬれ

(一九五番歌)

(『建礼門院右京大夫集』)

右京大夫が帝の御座所に参上した後、仲の良い友人同士で語り合っていたところに、重衡がやって来てさまざまなことを面白く話し、女房たちを並々でなく笑わせた。最後には「おそろしき物語り」をして女房たちを怖がらせている。ここで、この場面について考えてみたい。右京大夫たちが炭櫃を囲んで物語りをしていることから、季節は冬と考えて良い。では、なぜ重衡は、突然「おそろしき物語り」をしたのだろうか。

『枕草子』「御仏名のまたの日」に、宮中の仏名会に地獄絵の屏風を出したことが記されている場面がある。

御仏名のまたの日、地獄絵の御屏風取りわたして、宮に御覧せさせたまつらせたまふ。(『枕草子』「御仏名のまたの日」⁽²⁷⁾)

清少納言は、この絵をひどく気味悪がって、逃げ出してしまったと

⁽²⁸⁾いう。『栄花物語』「さまさまのよろこび」にも、宮中の仏名会に地獄絵の屏風を出したことが記されている。

十二月の十九日になりぬれば、御仏名とて、地獄絵の御屏風など取うでてしつらふも、目とどまりあはれなるに(略)

(『栄花物語』「さまさまのよろこび」⁽²⁹⁾)

また、『北山抄』の十二月の仏名会の記事の最後には、「令」撤「地獄変御屏風」とあり⁽³⁰⁾、仏名会と地獄絵の屏風は強く結びついていたことがわかる。

仏名会は歳暮の行事なので、季節は冬であり、その場には地獄絵の屏風が出されていた。『建礼門院右京大夫集』でも、右京大夫たちが集まっていたのは冬で、その場で重衡は「おそろしき物語り」をする。これらのことを考えると、右京大夫たちが集まって話していたのは、仏名会の日だったのではないだろうか。

年越しをする場面で、重衡は女房たちに交じって、仲良く語り合う。女性たちがいる中に、なぜ重衡だけは入っていくことができるのだろうか。それだけ女房たちに信頼されていたのだろうか。『平家公達草紙』には、女房たちがいる中に、重衡と藤原隆房が入ったことに対し、「隆房には、いまだかけをだに見えぬ物を」と隆房に顔を見られたことのみを恨んでいた。

また、このときの鬼語りが、後の地獄を暗示しているのではない

か、とも考えられている。⁽³¹⁾ だからこそ、この場面が選ばれ、右京大夫によつてあえて陽気な場面としてリメイクされたのではないか。

(2) 『平家公達草紙』

『平家公達草紙』の重衡は、人を笑わせる存在として描かれていることが多い。⁽³²⁾ その中でも、その性質がよく表れているのが次の場面である。

安元三年三月一日ころ、内裏にて、三位中将基通、三位中将知盛、頭中将実宗、左馬頭重衡、権亮少将維盛、隆房などやうの人々、あまた候に、内の上、仰せらるゝ様、「雨うちふりて、つれづれなる夜のけしきかな。目さめぬべからんこともがな」と仰せらるれば、(略)左馬頭重衡、「いざ、朝臣たち、ことひとつ、案じ出たるは」といへば、内の上、「例の重衡が、さりげなくて、面白きこと、いひ出べきぞ」と仰せらるゝに、「盗人のまねをして、中宮の御方の女房たち、おどし侍らん」と申。「いとよかなり」とて、各いでたつ程に、「さても、あやしき物とて、道にて、人にとがめられたらんは、いかにぞ。辛うもあるべきかな」との給はすれば、「さりとも、苦々しくならん時は、『あやまちすな』と申てん」といでたつ。

〔平家公達草紙〕⁽³³⁾

何か面白いことはないかと言う高倉天皇に、重衡が盗人の真似をして女房たちを脅かそうと提案する。その提案は採用され、隆房とともに女房のもとに向かうことになった。重衡の「いざ、朝臣たち、ことひとつ、案じ出たるは」という言葉に、高倉天皇が「例の重衡が、さりげなくて、面白きこと、いひ出べきぞ」と発言していることから、人を笑わせる存在として、高倉天皇が期待していることがわかる。

そして、盗人の真似をしているのが次の場面である。

各単衣かさねて、唐衣きながら、うたゝねなるさまなり。うゑにきたる衣を、ひきをとすに、あきれたる気色にて、うつ見たまふ心地どもは、うたがひなき、おそろし物どもこそ、おぼしけめ。あるかなきかの気色ども也。うちわらはれぬべきぞ、ねんじて、いづれも〜とりて、いでぬ。

(『平家公達草紙』)

重衡と隆房は盗人の真似をして、女房たちを怖がらせ、衣を奪って行く。怖がっている女房たちを見て笑いがこみ上げているが、こらえて立ち去った。この場面は、『建礼門院右京大夫集』の陽気で親しみやすい重衡と共通している。

その後、女房たちのもとに行くのが次の場面である。

しばしありて、うゑ、中宮の御方へ、わたらせ給。さぶらふか

ぎり、御供にまいりぬ。左馬頭重衡、権亮少将惟盛などは、中宮の御方さま、内外許りたる人なれば、ありつる女房たちのも「とへ行たれば、「只今、かゝることなむ有つる」とて、「わりなしとおもへるさまども、おろかならず」など、いひあひたまふに、たへず、うちわらひぬべき心地しければ、契れること有がほにもてなしてぞ、たちにつける。」

『平家公達草紙』
盗人にあつたことを話す女房たちの様子を見て、重衡たちは笑いをこらえきれず、その場を立ち去っている。先の場面と同じように、『建礼門院右京大夫集』の重衡像と共通している。その後、奪った衣は女房たちに返し、真相を知った女房たちに恨まれることになった。

ここまで、盗人の真似をする重衡を見てきたが、他の場面でも、重衡の人を笑わせる、明るい性質が見られる。

重衡の三位中将といひし人は、これを見て、なのめならず、おもしろがりけるを、内の上、入らせ給ひて召しければ、「今日の御装束どもの美しさに、目が眩れて、きと立ゝれ候はね」と
『平家公達草紙』
申ければ、内、中宮、いのと笑はせ給けり。『平家公達草紙』
賀茂祭で贅を尽くす女房たちの装束の美しさを、重衡は「今日の御装束どもの美しさに、目が眩れて、きと立ゝれ候はね」と大げさにほめ、それを聞いた高倉天皇と中宮徳子は笑っている。「冗談を言っ

て人を笑わせる重衡がここにも描かれている。

このように、重衡は「人を笑わせる」存在として描かれており、『平家公達草紙』は、重衡の人柄を次のように記している。

三位中将重衡といひし人は、世にあひ、思事なかりけれど、人の嘆くことなどは、をしはかり、なだめ申などしければ、人もありがたき事に喜びけり。はなかくを、をかきこと言ひて、人笑はせなどぞしける。かたちも、いとなまめかしく、きよらなりけり。

『平家公達草紙』は、重衡を「をかきこと言ひて、人笑はせなどぞしける」存在であると評価している。さらに、人の感情に敏感で、容貌も優れていたようだ。平安までの「笑い」の文化と、重衡の「笑い」の性質は異なっており、重衡から「をこ」の人物が出現し始める。中世的な文化の幕開けと言つても良いだろう。

(3) 『平家物語』

『建礼門院右京大夫集』や『平家公達草紙』の重衡は、陽気で「人を笑わせる」存在として登場していたが、『平家物語』の重衡はどのように描かれているのだろうか。

三位中将宣ひけるは、「此樂をば普通には五常樂といへども、

重衡が為には、後生楽とこそ観ずべけれ。やがて往生の急をひかん」とたはふれて、琵琶をとり転手をねぢて、皇馨の急をぞひかれける。
〔平家物語〕「千手前」

ここでも、五常楽を後生楽、皇馨の急を往生の急とする駄洒落を言う楽しい重衡を見ることができるが、『平家物語』ではそのような姿だけではなく、優美な公達としても登場する。

あの平家の人々は、甲冑弓箭の外は他事なしとこそ日来は思ひたれば、この三位中将の琵琶の撥音、口ずさみ、夜もすがらたち聞いて候に、優にわりなき人にておはしけり。

〔平家物語〕「千手前」

重衡の弾く琵琶の音、口ずさんだ曲を聞き、とても優美な人であったと記す。これまで確認してきたような明るく、楽しい姿や、南都を焼討ち、一谷合戦で副將軍として参加するような武人とは異なる、優美な姿を見ることが出来る。また、『平家物語』には、他にも重衡の優美な公達としての姿を見ることが出来る場面がある。

平家はもとより代々の歌人才能で候なり。先年この人々を花にたとへ候ひしに、此三位中将をば牡丹の花にたとへて候ひぞかし
〔平家物語〕「千手前」

平家の人々を花に喩えたとき、重衡は牡丹の花に喩えられたという。なぜ牡丹だったのだろうか。牡丹にはどのような意味があるのだろうか。

うか。

牡丹は、中国原産で、古く日本に渡来し、晩春に大きな花を咲かせる。その豪華さから、花の王とされた。³⁴⁾『古事類苑』にも、牡丹は富貴をもたらすので花王と呼んだと記されている。³⁵⁾

白居易の詩に、「牡丹芳」という詩があり、その中で牡丹の美しさが称えられている。

牡丹芳

牡丹の芳

黄金蕊綻紅玉房

黄金の蕊は紅玉の房に綻ぶ

千片赤英霞爛爛

千片の赤英 霞爛爛たり

百枝絳豔燈煌煌

百枝の絳豔 灯煌煌たり

照地初開錦繡段

地を照らして初めて開く錦繡段

当風不結蘭麝囊

風に当って結ばず蘭麝の囊

仙人琪樹白無色

仙人の琪樹は白くして色無く

王母桃花小不香

王母の桃花は小にして香んばしからず

(略)

穠姿貴彩信奇絶

穠姿 貴彩 信に奇絶

雜卉乱花無比方

雜卉 乱花 比方無し

石竹金錢何細碎

石竹 金錢 何ぞ細碎なる

芙蓉芍薬苦尋常

芙蓉 芍薬 苦だ尋常なり

(牡丹芳)³⁶⁾

白居易は、牡丹の美しさは比類なく、他のどの花よりも美しいと称えている。唐では、牡丹は花の中で最も美しいとされた花だった。

同じく「牡丹芳」には、牡丹を愛する人々の様子も詠まれている。

共愁日照芳難住 共に愁う 日照らして芳の住め難きを

仍張帷幕垂陰涼 仍りに帷幕を張りて陰涼を垂る

花開花落二十日 花開き花落つ二十日

一城之人皆若狂 一城の人 皆な狂えるが若し

(「牡丹芳」)

唐代において、牡丹は人々に熱狂的に愛されていたことがわかる。人々に愛され、美しい牡丹は、美しい女性と結びついて用いられることが多く、同じく「牡丹芳」には、次のような記述もある。

映葉多情隱羞面 葉に映じては情多くして羞じらしい面を

隠し

臥叢無力含醉粧 叢に臥しては力無く酔える粧を含む

低嬌笑容疑掩口 低嬌は笑容の口を掩うかと疑い

凝思怨人如断腸 凝思は怨人の腸を断つが如し

(「牡丹芳」)

牡丹のどのような様子も、美しい女性の仕草に見えると記している。さらに、『和漢朗詠集』の白居易の詩でも、妓女の美しさを牡丹の花に喩えたものがある⁽³⁷⁾。

李白の「清平調詞」は其三まであり、そのすべてで楊貴妃の美しさを牡丹になぞらえている。

雲想衣裳花想容 雲には衣裳を想い 花には容を想う

春風弘檻露華濃 春風檻を払つて 露華濃やかなり

若非群玉山頭見 若非群玉山頭にて見るに非ずんば

会向瑤台下逢 会す瑤台下に向いて逢わん

(「清平調詞」其二)⁽³⁸⁾

「清平調詞」は、長安の沈香亭に植えた牡丹の芳が開いたとき、玄宗は愛人の楊貴妃を連れて見物をした際、李白が楊貴妃を見て作った詩である⁽³⁹⁾。花を見ると美しい容姿を連想したという。「花」は牡丹のことを指しているため、牡丹を見ると楊貴妃の容姿が連想されたという意味になる。「清平調詞」其二には、次のように記されている。

一枝紅艷露凝香 一枝の紅艷 露 香を凝らす

雲雨巫山枉断腸 雲雨巫山 枉しく断腸

借問漢宮誰得似 借問す 漢宮誰か似るを得たる

可憐飛燕倚新粧 可憐の飛燕 新粧に倚る

(「清平調詞」其二)

楊貴妃の美しさを、牡丹においた露が香を集めたようだと称えている。「清平調詞」其三には、次のように記されている。
名花傾国兩相歡 名花傾国 両つながら相歡ぶ

長得君王帯笑看 長えに君王の笑いを帯びて看るを得たり

解釈春風無限恨 春風無限の恨みを解釈して

沈香亭北倚闌干 沈香亭北 闌干に倚る

〔清平調詞〕其三

名花の牡丹と傾国の美女の楊貴妃が、どちらもよろこびあつてゐるという。

このように、牡丹は美しい女性と結び付けられることが多かった。では、日本の漢詩における牡丹とは、どのようなものだろうか。『菅家文章』に、次の詩がある。

色即為貞白 色はすなはち貞白なり

名猶喚牡丹 名はなほし牡丹と喚ぶ

嫌随凡草種 凡草に随ひて種多られむことを嫌ふ

好向法華看 法華に向なむとして看るに好し

在地輕雲縮 地に在りては輕き雲縮る

非時小雪寒 時非らずして小しき雪寒いたり

繞叢作何念 叢を繞りて何の念ひをかなす

清淨寫心肝 清淨なるに心肝を寫かむ

『菅家文章』法花寺白牡丹⁽⁴⁶⁾

この詩では、牡丹は仏法の光華の象徴と見るにふさわしいといっている。

また、『本朝無題詩』にも、牡丹を詠んだ詩が収められている。

対花日夜倚闌干 花に対かひ 日夜闌干に倚り

再三沈吟憐牡丹 再三沈吟して 牡丹を憐ぶ

紅艷遶軒霞更暖 紅艷 軒を遶り 霞更に暖かに

粉粧当牖雪猶寒 粉粧 牖に当たり 雪猶寒し

自逢春暮將金買 春暮に逢ひてより 金を將て買ひ

為怕曉風秉燭看 曉風を怕るる為に 燭を秉りて看る

老去愁交冠蓋客 老去り 愁ひに 冠蓋の客と交はれり

莫嘲引興漏方闌 嘲ること莫かれ 興に引かれて漏も方に

闌けたるを

〔本朝無題詩〕五十一番「賦牡丹花」⁽⁴⁷⁾

この詩の作者大江匡房は、暮春の花の代表である牡丹、つまり、春とともに散りゆく牡丹が散ることを惜しんでいる。匡房と同じような視点で詠まれているのが、次の藤原敦光の詩である。

閏月芳辰今日窮 閏月の芳辰 今日に窮まれり

料知処々恨相同 料り知んぬ 処々恨み相同じきことを

(略)

勸来家醞唯斟露 勸め来る家醞は 唯だ露を斟むのみ

落尽庭花不厭風 落ち尽くす庭花は 風を厭はず

廉節追思吳李子 廉節は追思す 吳の李子

才名更謝漢文翁 才名は更に謝す 漢の文翁

終朝悵望倚軒檻 終朝悵望して 軒檻に倚り

閑翫牡丹一兩叢 閑かに翫ぶ 牡丹一兩叢

〔本朝無題詩〕二四四番

敦光は、暮れゆく春を惜しみながら、春とともに散りゆく牡丹を愛でている。さらに、詩の中で呉の国を連想している。

藤原通憲も、白氏文集を踏まえ、中国を連想するという視点で共通する牡丹の詩を作っている。

造物迎時尤足賞 造物 時を迎へて 尤も賞するに足る

牡丹栽得立沙場 牡丹 栽多得て 沙場に立てり

衛公旧宅遠無至 衛公が旧宅 遠ければ至ること無く

白氏古篇読有香 白氏が古篇 読めば香有り

千朵露薰幽砌下 千朵の露は薰す 幽砌の下

一条霞聳廢離傍 一条の霞は聳ゆ 廢離の傍

若非道士投竜腦 若し 道士の竜腦を投するに非ずんば

定是美人忘麝囊 定めて是れ 美人の麝囊を忘るるならん

〔本朝無題詩〕五一番

ここでは、牡丹から白居易を連想し、さらに、その香りからは美人を連想している。

漢詩における牡丹の情報を整理すると、中国の牡丹は美しい女性

としばしば結びつけられ、日本の漢詩では、中国の牡丹を熱狂的に愛するという風習からか、「牡丹」は中国をイメージする花であった。牡丹は暮春の花の代表であるがゆえに、春とともに散りゆく儚さというとらえ方も見受けられる。

それでは、漢詩ではなく、和歌や日本文学における牡丹はどのような意味があるのだろうか。『詞花和歌集』に、「牡丹」の題で次の歌がある。

新院位におはましし時、牡丹をよませ給けるによみ侍ける

咲きしより散りはつるまでみしほどに花のもとにて二十日へにけり

〔詞花和歌集〕春・四八・藤原忠通⁽⁴²⁾

この歌は、先に挙げた白居易「牡丹芳」の「花開花落二十日、一城之人皆若狂」⁽⁴³⁾によっている。中国を連想した詠み方と考えて良いだろう。次に、『新古今和歌集』の例を確認したい。

六条撰政かくれ侍りてのち、植へきて侍りける牡丹のさきて侍けるをおりて、女房のもとよりつかはして侍ければ形見とて見れば歎きのふかみ草な中へにほひなるらん

〔新古今和歌集〕哀傷・七六八・藤原重家⁽⁴⁴⁾

ここでは、形見として牡丹が登場している。先に確認した春とともに

に散りゆく儂さと関係があるのかもしれない。

『栄花物語』にも牡丹は登場する。

北の廂の渡殿かけて、御障子どもに功德の心ばへある絵どもをかかせたまひて、御簾ども懸け渡して、塗卒など渡して、宮々、上の御局と見えたり。この御堂の御前の池の方には、高欄高くして、その下に薔薇、牡丹、唐撫子、紅蓮花の花を植ゑさせたまへり。御念仏のをりに参りあひたれば、極楽に参りたらん心地す。

『栄花物語』「たまのうてな」

ここでの牡丹は、阿弥陀堂の庭に、薔薇や唐撫子、紅蓮花とともに植えられている。薔薇や唐撫子は中国の花であり、それらの花とともに植えられているという点からも、中国を連想させているだろう。さらに、場所が阿弥陀堂の庭であるため、仏教とも深く関係がある場面である。これは、極楽浄土のイメージであろう。

『蜻蛉日記』の牡丹も、『栄花物語』と同様に、仏教との関係がある場面で登場するが、また異なる要素もある。

まづ僧坊におりて、見出だしたれば、前に籬ゆひわたして、また、なにとも知らぬ草どもしげき中に、牡丹草どもいと情なげにて、花散りはてて立てるを見るにも、「花も一時」といふことを、かへしおぼえつつ、いと悲し。

『蜻蛉日記』⁽⁴⁵⁾

場所が寺であるため、仏教との関係が重視される。これまでは見ることはなかった牡丹が散っている姿を見ることで、ひどく悲しくなったという。この場面には、牡丹が春とともに散るという儂い様子が描かれているのではないか。

藤原定家の手によるという『松浦宮物語』にも、牡丹が登場し、牡丹を目印に女性の住居を探る場面がある。

昼折りつる花の手に当たるをまさぐりつつ、「さらば、この花の枝にてや、そことは見えむ。尋ね出でて疎まれなんこそ」と、さすがにうち笑ふけはひまで、なほ身にしむふしのみまさるぞ、あぢきなかりける。

『松浦宮物語』⁽⁴⁶⁾

この女性は中国の女性で、とても美しい人物である。ここでも、牡丹は中国風なイメージと、美しい女性と結びついていた。『松浦宮物語』には、この場面だけではなく、牡丹を愛する中国の国柄が記されている場面もある。⁽⁴⁷⁾

これまで見てきたことを確認すると、牡丹には中国風なイメージがあり、美しい女性と結びつきやすい花であった。他にも、牡丹は暮春の花の代表であるがゆえに、春とともに散りゆく儂いイメージや、仏教と関係しているものもあつた。

それでは、『平家物語』で重衡が牡丹に喩えられたことには、どのような意味があつたのだろうか。重衡は、生け捕られた後、千手前

と歌を詠み合う場面があり、重衡和漢朗詠は『集』の詩を朗詠した（『平家物語』「千手前」）。漢詩から、中国を連想させる場面である。さらに、重衡には女性と関わる話が多く、どの女性も美しい。美しい女性と結びつく重衡に、美しい女性と結びついた牡丹を重ねたのだろうか。また、重衡は壇ノ浦で平家が滅亡した後、南都を焼討ちしたことによる罪を背負って処刑される。ここに、牡丹の持つ儂いイメージと、仏教に関係があるイメージを重ねたように思える。このように、牡丹の持つさまざまな性質と、重衡の性質が重なったため、重衡は牡丹に喩えられたと推測しておきたい。

おわりに

重衡は仏敵としてのイメージが強く、『玉葉』には「下手之重衡」、「六代勝事記」には東大寺の大仏再建に寄付した重衡の銅だけが、他の銅と混ぜられなかった話が伝えられている。南都焼討ちの罪による処刑の後、『玉葉』では奈良坂に首をさらされ、『平家物語』では焼討ちの号令をかけた場所に首をさらされた。『源平盛衰記』には、重衡の遺骸を犬が食べようと争っていたことが記される。

一方、『建礼門院右京大夫集』や『平家公達草紙』では、優雅な公達としての重衡を見ることが出来る。『建礼門院右京大夫集』では、

冗談を言う陽気な重衡が描かれている。右京大夫たちが集まって話している場に重衡も交じり、「おそろしき物語り」をした。仏名会は地獄絵の屏風と強く結びついており、右京大夫たちが集まっている場は、仏名会の日だったと考えられる。このときの鬼語りが、後の地獄を暗示しているのではないかと考えられている。だからこそ、この場面が選ばれ、右京大夫によってあえて陽気な場面としてリメイクされたのではないか。

『平家公達草紙』では、人を笑わせる重衡の姿が見られる。重衡から「をこ」の人物が出現し始める。中世的な「笑い」の文化の片鱗がここに窺える。また、『平家物語』では、重衡は牡丹に喩えられる。牡丹は、中国のイメージを有し、美しい女性と結びつきやすい花であった。また、牡丹は春とともに儂く散るイメージや、仏教と関係して登場する花でもあった。

重衡は、生け捕られた後に、千手前に向けて和歌ではなく、漢詩を朗詠しており、牡丹の持つ中国のイメージと重なる。さらに、重衡には、千手前をはじめとする、美しい女性と関わる話が多く、牡丹の美しい女性と結びつきやすい性質とも重なる。壇ノ浦で平家が滅亡した後、南都焼討ちの罪のために処刑され、死後もその罪を負う重衡の姿は、仏教と関係して極楽浄土を暗示する牡丹の花が用意された。牡丹が持つさまざまな性質は、重衡の人物像と重なり合う。

牡丹の比喩は、仏敵として断罪された重衡の救済であり、一種の供養ともとらえられるのである。

注

- (1) 佐伯真一「重衡造型と『平家物語』の立場」『平家物語遡源』(一九九七年、若草書房)。
- (2) 池田敬子「平家の重衡」『国語国文』第四六卷三号(一九七七年、中央図書出版社)、佐伯真一「重衡造型と『平家物語』の立場」『平家物語遡源』(一九九七年、若草書房)、栃木孝惟「二つの生と死——重盛と重衡」『日本文学』第二四卷一〇号(一九七五年、日本文学協会) など。
- (3) 『平家物語』の本文は、『新編日本古典文学全集 平家物語』(一九九四年、小学館)による。以下、同じ。
- (4) 以下、『国史大系 公卿補任』(一九六四年、吉川弘文館)による。
- (5) 「中宮(徳子御年廿四、六波羅入道前太政大臣二女、母贈左大臣時信公女、二品時子尼、御懷妊、当五ヶ月、仍有御着帯事、初度也、于時閑院為皇居中宮、伝聞、(略)大進(光綱、衣冠参入、亮重衡朝臣為奉幣使参伊都岐嶋、権大進宗頼、大夫進尹範不進云々)」

『山槐記』治承二年六月二十八日条。

- (6) 「辰刻頭中将告送云、中宮有御産気者、(略)此間大夫参上申闕白云、法皇仰云、已皇子降誕、早可告申此由者」『玉葉』治承二年十一月十二日条。
- (7) 良久春宮御々座、亮重衡朝臣奉抱之、出自御帳東間、奉居昼御座『玉葉』治承四年一月二十日条。
- (8) 「先是新主出御(御直衣、亮重衡朝臣奉抱之、此事兼有議云々、幼主之例雖多、未有如之事、未有如此之事、嘉承垂庇簾、是有故坎、亮關儀云々、永治無所見、但宇治左府記云、如成人之礼、爰知無奉抱之人坎、今度伝・大夫等相議、准御真菜例、以亮備此役、未被仰昇殿以前、侍臣不能昇堂上、此条雖似忘礼儀、事不默止、故宜不糾法云々」『玉葉』治承四年二月二十一日条。
- (9) 「奉居幼主於高御座上(頭前亮重衡朝臣褰御座後帷)」『玉葉』治承四年四月二十二日条。
- (10) 「我朝はいふに及ばず、天竺震旦にもこれ程の法滅あるべしともおぼえず」、「ほのほの中に焼けて死ぬる人数を記いたりければ、大仏殿の二階の上には一千七百余入、山科寺には八百余人、或御堂には五百余人、或御堂には三百余人、つぶさに記いたりければ、三千五百余人なり」『平家物語』「奈良炎上」。
- (11) 「わが心におこッては焼かねども、悪覚おほかりしかば、手々

に火をはなつて、おほくの堂塔を焼きはらふ。末のつゆ本のしづくとなるなれば、われ一人が罪にこそならんずらめ」(『平家物語』内裏女房)、「就中に南都炎上の事、王命といひ武名といひ、君につかへ世にしたがふ法通れがたくして、衆徒の悪行をしづめんが為にまかりむかッて候ひし程に、不慮に伽藍の滅亡に及び候ひし事、力及ばぬ次第にて候へども、時の大將軍にて候ひし上は、責一人に帰すとかや申し候なれば、重衡一人が罪業にこそなり候ひぬらめと覚え候」(『平家物語』「戒文」)、「まづ南都炎上の事、故入道の成敗にもあらず、重衡が愚意の発起にもあらず。衆徒の悪行をしづめむがためにまかりむかッて候ひし程に、不慮に伽藍滅亡に及びし事、力及ばぬ次第なり」(『平家物語』「千手前」)。

(12) 「梶原源太景季、鎧ふんばり立ちあがり、もしやと遠矢によッびいて射たりけるに、三位中将馬の三頭を藪深に射させて、よわるところに、後藤兵衛盛長、我馬召されなんずとや思ひけん、鞭をあげてぞ落ち行きける。(略)三位中将、敵はちかくく、馬はよわし、海へうちいれ給ひたりけれども、そこしも遠浅にて沈むべき様もなかりければ、馬よりおり、鎧の上帯きり、高紐はづし、物具ぬぎすて、腹をきらんとし給ふところに、梶原よりさきに庄の四郎高家、鞭鎧をあはせてはせ来り、いそぎ馬よ

り飛び降り、「まさなう候。いづくまでも御供仕らん」とて、我馬にかき乗せ奉り、鞍の前輪にしめつけて、わが身は乗りがへに乗つて、御方の陣へぞけへりける」(『平家物語』「重衡生捕」)。

(13) 「仰せ下されけるは、『八島へかへりたくは、一門の中へいひおくつて、三種の神器を都へ返し入れ奉れ。しからば八島へかへさるべし』との御気色で候」(『平家物語』「内裏女房」)。

(14) 「重衡申云、書札副使者(重衡郎従云々)、遣前内府之許、乞取劍璽可進上云々」(『玉葉』寿永三年二月十日条)、「或人云、重衡所遣前大臣之使者、此兩三日帰參、大臣申云、畏承了、於三ヶ宝物並主上、女院、八条殿者、如仰可令入洛」(『玉葉』寿永三年二月二十九日条)。

(15) 「御子の一人もおはせぬ事を、母の二位殿もなげき、北の方大納言佐殿も本意なきことにして、よろづの神仏に祈り申されけれども、そのしるしなし。『かしこうぞなかりける。子だにあらましかば、いかに心苦しからむ』と宣ひけるこそ、せめての事なれ」(『平家物語』「海道下」)。

(16) 「前内府並其息清宗・三位中将重衡等、義経相具所參洛也、而乍生不入洛、無音於近江辺可梟首其首、可渡使序哉、将可棄起哉、可随院宣之由、頼朝卿令申旨、義経所申也、可計申者(但重衡ハ遣南都了云々)」(『玉葉』元暦二年六月二十一日条)。

(17) 「伝聞、重衡首於泉木津辺切之、令懸奈良坂云々」(『玉葉』元曆二年六月二十三日条)。

(18) 「その頸をば般若寺大鳥井の前に釘づけにこそかけたりけれ。治承の合戦の時、ここにうったつて仰藍をほろぼし給へる故なり」(『平家物語』「重衡被斬」)。

(19) 「三位中将、土肥次郎を召して、「出家をせばやと思ふは、いかがあるべき」と宣へば、実平此由を九郎御曹司に申す。院御所へ奏聞せられたりければ、「頼朝に見せて後こそ、ともかうもはからはめ、只今はいかでかゆるすべき」と仰せければ、此よしを申す」(『平家物語』「戒文」)。

(20) 「中将、「今は是程の身となつて、何事をか申し候べき。ただ思ふ事としては出家ぞしたき」と宣ひければ、帰り参つて此よしを申す。兵衛佐、「それ思ひもよらず。頼朝が私のかたきならばこそ。朝敵としてあづかり奉つたる人なり。努々あるべうもなし」とぞ宣ひける」(『平家物語』「千手前」)。

(21) 「出家して、形見にかみをも奉らばやと思へども、ゆるされなければ力及ばず」(『平家物語』「重衡被斬」)。

(22) 「重衡卿の首をば頼兼大衆の中へ渡したりければ、衆徒これに請け取り、東大寺・興福寺の大垣三度廻らし、法華寺の鳥居前に、竿に貫き高く捧げてこれをさらす。治承の合戦の時、こ

こに打立ち、南都を亡ぼしたればとてなり。その後、般若野の道はたに大卒塔婆を立て、礎にしてこれをさらす」(『源平盛衰記』卷四十五「内大臣京上り、斬らる附重衡南都に向ひ斬らる並大地震の事」)。『源平盛衰記』の本文は、『新定源平盛衰記』第六卷(一九九一年、新人物往来社)による。以下、同じ。

(23) 「庭を見れば沓の鼻をかかへて、かぶり居たる犬あり。立廻り後戸を見れば、首もなき死人うつぶしに臥したり。犬三匹そばにてこれを諍ひ居たり」(『源平盛衰記』卷四十五「内大臣京上り、斬らる附重衡南都に向ひ斬らる並大地震の事」)。

(24) 「又重衡卿後室彼遺物之中。以金銅具奉加之。即以其金銅欲鑄加之処。炉亦破裂。銅湯多流出。遂於彼奉加金銅具。不相交而只如本。仍見聞之客。罪業之至。彈指垂憐」(『東大寺造立供養記』)。

(25) 「又三位中将重衡者当寺焼失之大將也遂元曆二年六月廿二日被渡南都被斬首畢彼妻室重衡所持物内以金銅具令奉加之上人垂慈愍以彼銀銅等欲奉鑄加大像之処炉忽令破裂即於彼金銅之類不變本質皆以流出深重之罪業尚漏如来之慈悲」(『東大寺統要録造仏篇』)。

(26) 『建礼門院右京大夫集』の本文は、石川泰水、谷知子著『和歌文学大系 式子内親王集・建礼門院右京大夫集・俊成卿女集・

- 艶詞』(二〇〇一年、明治書院)による。以下、同じ。
- (27) 『枕草子』の本文は、『新編日本古典文学全集 枕草子』(二〇〇七年、小学館)による。以下、同じ。
- (28) 「ゆゆしういみじき事かぎ死なし。」「これ見よ、これ見よ」と仰せらるれど、さらに見はべらで、ゆゆしきにこへやに隠れ臥しぬ。『枕草子』「御仏名またの日」。
- (29) 『栄花物語』の本文は、『新編日本古典文学全集 栄花物語』(二〇〇八年、小学館)による。以下、同じ。
- (30) 『北山抄』の本文は、土田直鎮、所功校注『神道大系 朝儀祭祀編三 北山抄』(一九九二年、神道大系編纂会)による。
- (31) 石川泰水、谷知子著『和歌文学大系 式子内親王集・建礼門院右京大夫集・俊成卿女集・艶詞』(二〇〇一年、明治書院)、『新編日本古典文学全集 建礼門院右京大夫集 とはずがたり』(一九九九年、小学館)など。
- (32) 他には、後白河院五十賀における青海波舞の垣代の一人として登場する場面や、平家都落ちの際、親しかった女房に甲冑姿で別れの挨拶をする場面がある。どちらも優雅な公達の姿である。
- (33) 『平家公達草紙』の本文は、櫻井陽子、鈴木裕子、渡邊裕美子『平家公達草紙』『平家物語』読者が創った美しき貴公子たちの物語』(二〇一七年、笠間書院)による。以下、同じ。
- (34) 「牡丹」『日本国語大辞典』、「牡丹」松浦友久編著『漢詩の事典』(一九九九年、大修館書店) 久保田淳「牡丹」『歌ことば歌枕大辞典』(一九九九年、角川書店)による。
- (35) 「牡丹」百両金、富貴花、一捻紅、鹿韭同、或云一名鼠姑、未詳、宜考、本草又詩格註以其花富貴、故謂之花王。『古事類苑』「牡丹」。
- (36) 「牡丹芳」の本文及び書き下し文は、高木正一注『新修中国詩人選集 白居易』(一九八四年、岩波書店)による。以下、同じ。
- (37) 「莫恁紅巾遮面咲 春風吹綻牡丹花」とある。『和漢朗詠集』の本文は、『新編日本古典文学全集』(二〇〇八年、小学館)による。
- (38) 「清平調詞」の本文及び書き下し文は、武部利男注『新修中国詩人選集 李白』(一九八三年、岩波書店)による。以下、同じ。
- (39) 武部利男注『新修中国詩人選集 李白』(一九八三年、岩波書店)による。
- (40) 『菅家文章』の本文及び書き下し文は、『日本古典文学大系 菅家文章 菅家後集』(一九八六年、岩波書店)による。以下、同じ。
- (41) 『本朝無題詩』の本文及び書き下し文は、本間洋一注『本朝無題詩全注釈一』(一九九二年、新典社)による。以下、同じ。

- (42) 『詞花和歌集』の本文は、川村晃生、柏木由夫、工藤重矩校注『新日本古典文学大系 金葉和歌集 詞花和歌集』(二〇一二年、岩波書店)による。
- (43) 『新日本古典文学大系』の注による。
- (44) 『新古今和歌集』の本文は、田中裕、赤瀬信吾校注『新日本古典文学大系 新古今和歌集』(二〇一三年、岩波書店)による。
- (45) 『蜻蛉日記』の本文は、『新編日本古典文学全集 土佐日記 蜻蛉日記』(二〇〇八年、小学館)による。
- (46) 『松浦宮物語』の本文は、『新編日本古典文学全集 松浦宮物語 無名草子』(一九九九年、小学館)による。以下、同じ。
- (47) 「二十日余りになりて、御前の牡丹の盛りに咲き満ちたるを、ところからは並ぶべうもなくめであへる」(『松浦宮物語』)。